色、模様知る貴重な資料

小場恒吉作「国鱒図」

赤川菊村の遺族から寄贈された小場恒吉の彩色画「国鱒図」は、クニマスの体の特徴や模様が細密に描かれ、制作年や経緯もはっきりしている。寄贈を受けた県立博物館は「いままで知られていなかったクニマスの色や模様の詳細を知ることができる貴重な資料だ」と話している。（1面参照）

郷土史家・赤川菊村が所蔵

遺族、県立博物館に

クニマスは田沢湖の固有種。サケ科で体長は二〇センチ台前半、大きいものでも三〇センチ。昭和十五年、国策による電源開発で田沢湖に玉川酸性水が流入したため死滅した。

クニマスについては、大正四年に出版された「田沢湖調査報告書」に雌雄ともに黒写真が掲載され、「まぼろしの魚 クニマス百科」（秋田魁新報社刊）

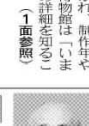
「門屋養安日記」に赤川菊村が独自の解釈を加えているとされる「院内銀山日記」原稿

養安の日記を抄録・翻刻

「銀山日記」も寄贈

赤川菊村が「門屋養安日記」（昭和十七年刊）に抄録・翻刻した「院内銀山日記」の原稿（三冊）や、「真澄遊覧記」刊行会編「東洋手風俗」（三元社刊）に柳田が寄せた実筆の解題が県立博物館に寄贈された。

膨大な菊村コレクションは、県立博物館、県立図書館、美郷町のほか、十八年度開館を目指している「あきた文学資料館」（現在は県保管）にも贈られた。



赤川　菊村

赤川菊村　東京で新聞記者として活躍、東京毎日新聞時代・宮崎県延岡市長、木村大保老船頭高橋市蔵特定の時期に見られる模様なのかもしれないが、現段階では判断できない。小場が模写した時手が分からないのは残念だ。学術的な価値は高い」と話している。

小場は日本芸術院恩賜賞の第一回受賞者。東京美術学校（現東京芸大）工芸科主任教授を務め、法隆寺、平等院鳳凰堂の修復などは彼なしには成り得なかったといわれる。

小場研究の第一人者、佐々木榮孝さんと＝秋田市＝は「小場は、文様の模写に命をかけて取り組んだ。彼の作なら、特徴を的確にとらえ、色彩を含め細部まで忠実に描いているはずだ」と語っている。

ってはいるものの、いずれも色が落ちしている。魚体の色や模様を伝える貴重な資料は大変貴重」と語っている。

賛（添え書き）によると、菊村に贈ったのは昭和二十三年十一月。「明治三十一年に田沢湖に遊びにいったときに描いた木尻鰌の図を自宅で見つけたので、これを写して菊村に贈る」と経緯が記されている。たいまつの燃えさしが描かれているのは、クニマスの魚体の色が、燃えさしの焦げた色と似ていることから「木尻鰌」と呼ばれていたため。

図では、これまで標本などで明らかになっているクニマスの大きさで長い各鰭や、鋭い歯ひ描かれている。杉山部長は「小づらにクニマスの特徴を細かくとらえている」と語る。

注目されるのが魚体の色。黒い部分が魚体の半分以上を占め、腹の部分には等間隔の白いしま模様がある。背部分の黒は一部が淡く青みがかっている。杉山部長は「これまでは魚体全体が黒いと、特定の時期に見られる模様だされてきた。産卵期など、

者を探し出し、事件をドキュメント風に仕立てた連載「桜田門」などを執筆し、昭和3年、46歳で帰郷し、秋田魁新報社一般社会部に在籍しながら郷土史研究に打ち込んだ。主な著書に「大田祝二町長」「藤木村大保老船頭高橋市蔵」「北嶋家と田中太郎」など。

自刃をスクープしたほか、「桜田門外の変」に加わった水戸浪士の生存

© 秋田魁新報社　20050128（25面）　秋田魁新報